



Title	『フフ・トグ』紙上の「モンゴル民族」についての記事と、その背景：近代言語学と人種・民族言説の共振
Author(s)	中井, 健太
Citation	EX ORIENTE. 2024, 28, p. 207-209
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95011
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『フフ・トグ』紙上の「モンゴル民族」についての 記事と、その背景

——近代言語学と人種・民族言説の共振——

中井 健太

弓削尚子が指摘するように、近代科学の客観性とは一種の神話であり、逆に言うと近代科学の非客観性は、近代という時代の考察のための重要な視点である。社会進化論的な考えが浸透するに伴い、世界の森羅万象を法則性や普遍性で説明できるという一種の信仰が知識人の間に広がっていった。その延長線上に、例えば人種学や比較言語学といった近代科学の誕生を位置づけることができる。

民族や言語の起源・系譜を論じる学問は、政治的な民族主義や民族差別に容易に結びつく。ナチスの「アーリア民族」、戦前日本の「日鮮同祖論」等がわかりやすい例だ。前者は印欧比較言語学の成果の曲解であり、後者も、背景には「アルタイ語族」論がある。そう考えると、近代言語学の学知と民族主義言説の共振は、近代ナショナリズムにおいて相当程度に一般化できるように思われる。

「ウラル・アルタイ語族」仮説は近代言語学の熱い議論のテーマであった。この議論はアジアではどのように政治や国際関係と結びつき、どのような威力を発揮したのだろうか。本発表では、戦前から戦中期の日本の種々の媒体上に現れた「ウラル・アルタイ」言説の分析に加え、満洲国で出版されていたモンゴル語新聞に掲載された興味深い記事についても比較・検討を試みた。

「ウラル・アルタイ」仮説は、当時の日本の政策上、非常に都合がよい議論であり、当時の日本の様々な媒体において積極的に用いられ、応用された。日

本軍の朝鮮、次いで満洲、モンゴルへの進出と支配を「科学」的に肯定することができると同時に、スラブ系のロシアや中国（≒漢民族）による満洲、モンゴルの進出と領有も「科学」的に否定することができるからだ。1927年、関東軍の参謀だった石原莞爾は、満蒙領有論の根拠として「満洲蒙古人は漢民族よりも寧ろ大和民族に近き」ことを、民族自決概念と関連づけて論じている（『現在及将来に於ける日本の国防』）。その数年後、関東軍は満洲事変を起こすが、当時朝鮮軍の司令官だった林銑十郎は、日・朝・満・蒙が「ウラル・アルタイ系民族に属する同根の民種」であることを根拠に、軍の派遣を正当化する記述を残している（『満洲事変日誌』）。なお、学術界でも、例えば著名な東洋史学者の白鳥庫吉はウラル・アルタイ論者であった。彼は「ウラル・アルタイ民族」という語を多用し、言語分類を民族分類に読みかえる記述を多く残している。以上のことから、言語学の仮説にすぎない「ウラル・アルタイ」言説が、民族的な同一性を説明するための政治的主張に変化していく過程が読み取れる。科学的学術と政治・国際情勢、イデオロギーの3つがそれぞれに最後作用を及ぼしあいながら「ウラル・アルタイ」が再生産され続けていった。1920年代後半から30年代の日本は、概して、日本の政策と相性が良かった「ウラル・アルタイ」民族が肯定的に論じられることが多かった。

日本の傀儡国家の満洲国の首都新京（現長春）では1941年から終戦の45年までモンゴル語の新聞 *Khokh Tug*（『青旗』）が出版されていた。この『フフ・トグ』の1941年9月27日号に、“*delekei dakin-dur bayiqu mongyul uysayatan-i taniyuluy-a*”（「世界のモンゴル民族を知ろう」）という記事が掲載された。著者のアミンサヒクチなる人物が所属していた興安学校のあった王爺廟は当時モンゴル民族主義が盛んな地であった。

記事に付された地図では、モンゴル系民族とテュルク系諸民族の分布地域に加え、ハンガリーとフィンランド、エストニアに色が塗られており、全てが「モンゴル民族」（*mongyul uysay-a*）として説明されている。つまり、ほぼ全てのウラル・アルタイ諸語話者を「モンゴル民族」としている。また、本文でも、エストニアやハンガリーは古代に「モンゴル民族」が征服・移住して住み

着いたものだと説明されている。さらに、世界の3大民族として「エチオピア民族」「コーカサス民族」「モンゴル民族」を挙げ、モンゴロイド人種としても「モンゴル民族」を述べている。つまり、「モンゴル民族 (mongyul uysay-a) ≡ ウラル・アルタイ諸語話者 ≡ モンゴロイド人種」の構図になっている。これを諸概念の混同による荒唐無稽な記事として片付けることは簡単だ。しかし、上で述べたように、近代科学とナショナリズムは密接な関係を考えると、この記事もまた、近代科学（特に言語学）と民族主義が共振した例の一つとして捉えることができよう。記事の著者がこれらの知識をどこでどう学んだのかはわからないが、少なくとも、科学的知識が歪められつつ伝播する近代の空気を共有していたことは確かだ。

今後は、実質的にソ連の支配下にあったモンゴル人民共和国での民族言説についても検討したい。本発表で紹介した記事は、いわゆる汎モンゴル主義がタブーだったモンゴル人民共和国側では生まれ得なかった記事であろう。そうした制約がある中で、どのような言説が生まれたのだろうか。

